

## 制服に関する研究(第1報)

高校生の制服に対するイメージと自己概念との関連性

池田揚子\*・天木桂子\*\*・大木由里\*\*

(1992年6月18日受理)

### 緒 言

中学や高校に進学する場合、選ぶ視点として、最近その学校のイメージがあげられるようになってきた。制服も、その中の一つとして選択の重要なポイントとなっている。学校側も、より洗練されたデザインへの変更、有名デザイナーの起用など様々な試みを行って生徒の確保に努力する風潮が見られる。

制服は、生徒にとって在学中ほとんど毎日着用する被服であり、最も身近でなじみ深いものである。一方で、制服はその学校のシンボリック役割を果たしていたり、中高生らしさという枠組みの中で強制的役割を果たしている側面があるため、生徒にとってその心理的圧迫は大きいと考えられる。また、心身ともに成長し、同時に自己の確立が行われる時期に着用する被服であることから、影響は小さくない。そのため、制服が生徒に与える心理的影響を探ることは大切だと考えられる。

制服に関する研究はこれまでも行われており、三井ら<sup>1,2)</sup>、川本ら<sup>3)</sup>、大枝<sup>4)</sup>は、制服の実態や意識、また保健衛生的な面からの報告をしている。一方、被服心理に関しては、制服を対象としたものではないが、たとえば藤原<sup>5)</sup>、中川ら<sup>6)</sup>、神山ら<sup>7)</sup>の報告があり、被服への関心度、好きな被服と感情や意識、行動などの関連を明らかにしている。

本研究は、制服という特定の被服を取り上げ、高校生の男女を対象に、そのイメージを調べた。同時に、着用者の自分自身に対する現実のイメージと、こうありたいという理想のイメージも調べ、制服と関連させて、特徴を明らかにすることを目的とした。研究を行うにあたっては、藤原の女子大生を対象にした好きな被服のイメージと自己概念の関連についての報告<sup>8)</sup>を基にし、結果の比較も行った。

### 調査方法

#### 1. 調査時期および対象者

1989年8月~11月にかけて、各学校ごとに質問紙を用いた集合調査法で行った。

対象は、岩手県盛岡市内および周辺の高等学校14校(公立男女共学校11校、私立女子高校

\* 岩手大学教育学部家政科

\*\* 岩手県立広田水産高等学校

3校)の生徒である。被験者は、1～3年生の男子1,022名、女子969名で、うち有効だったのは、男子644名(63.0%)、女子673名(69.5%)、合計1,317名(66.1%)であった。

## 2. 調査の測定尺度および測定項目

藤原<sup>9)</sup>が、用いた形容詞対30項目を測定尺度として使用した。各項目に、左から「非常に」、「かなり」、「やや」、「どちらでもない」、「やや」、「かなり」、「非常に」の7段階の選択肢をつけ、「理想的自己」、「現実的自己」、「好きな被服」、「制服」の4概念について評定させた。評定の前に、それぞれ以下のような説明を口頭で述べた。

- ・理想的自己：あなたは、あなた自身についてどうありたいと思いますか。
- ・現実的自己：現在のあなた自身はどれに当てはまると思いますか。
- ・好きな被服：あなたの好きな被服はどれに当てはまりますか。
- ・制服：あなたの着用している制服、または制服一般について、あなたのイメージは次のどれに当てはまりますか。

## 3. 分析

評定尺度に左から1～7の点数を与え、各概念の尺度得点の平均値を算出して尺度上にプロットした。

次に、4概念をまとめて主因子法による因子分析を行った。サンプル数(被験者)が多すぎるため、ランダムに抽出した男女各320～340名の代表集団を対象とした。結果を主成分分析にかけて因子数を決定した後、各因子の負荷量、および因子得点の平均値を各概念ごとに算出し、意味空間にプロットした。また、4概念の関連を明らかにするため、それぞれについて形容詞30項目を変数とした因子分析を行い、全被験者の因子得点を算出して各因子間の積率相関係数を算出した。

分析には、協本ら<sup>9,10)</sup>のプログラムを参考にし、全体を組み直して使用した。

## 結果および考察

### 1. 各形容詞対の評定平均値

4つの概念について、各形容詞対の尺度得点の平均値を男女別に尺度上にプロットした結果を、Fig. 1, Fig. 2に示す。

#### 1-1 男子高校生

全体的に見て、評定値の低い方から、理想的自己、好きな被服、現実的自己、制服の順に並んでいる。

また、ほとんどの項目で評定値が“やや～やや(3～5点)”の間に入っており、評価の幅が狭いのが大きな特徴である。同時に、各概念間の差も小さい。特に、慎重深い～慎重深くない、若々しい～大人っぽい、ほっそりした～ふっくらした、繊細な～大胆な、女っぽい～男っぽい、単純な～複雑な、高尚な～俗っぽいの7つは、概念による評定値の違いがほとんどなかった。概念によって違いがみられるのは、個性的な～平凡な、進歩的な～保守的な、暖かい～冷たい、魅力的な～魅力的でない、明るい～暗い、ゆったりした～きゅうくつなの6項目であった。また、すべての概念に共通して評定が高い項目は、女っぽい～男っぽいであり、低いのは、清潔な～不潔なであった。

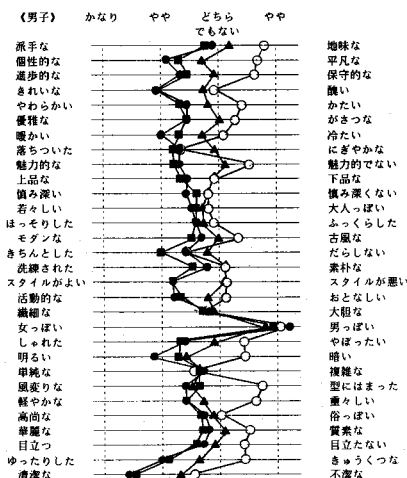


Fig.1 Average of rating scores each of four concepts for boy students.  
 ●: ideal self-concept,  
 ▲: actual self-concept,  
 ■: favorite clothes, ○: school uniforms

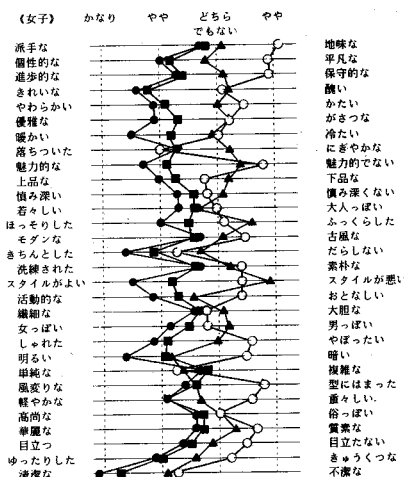


Fig.2 Average of rating scores each of four concepts for girl students.  
 ●: ideal self-concept,  
 ▲: actual self-concept,  
 ■: favorite clothes, ○: school uniforms

今回調査対象とした高校の男子制服は、冬用で共学11校中10校が黒の詰襟（他の1校は紺ブレザー）、夏用は全11校が白のワイシャツとほぼ共通している。そのため、制服の評定値には学校間の差がほとんど見られなかった。男っぼいが非常に高い評定値を示したのも、詰襟型であることが大きく影響していると考えられる。

また制服は、地味な、平凡な、保守的な、魅力的でない、スタイルが悪い、やぼったい、暗い、型にはまった、重々しい、質素な、目立たない、きゅうくつなどの点数が高く、好ましいイメージではなかった。これ以外の項目についても、制服は他の3つの概念とは離れた傾向があった。このことは、制服が自分の理想や着たい服のみならず、現実の自分の姿とも離れた被服であることを意味していると解釈できる。

1-2 女子高校生

女子はほとんどの項目で“かなり～やや(2～5点)”の間に入っており、男子に比べて評定値の幅が広く、概念によって値の異なるものが多いのが特徴である。好きな被服と制服の評定値は男子と大きな差が見られないが、男子に比べて理想的自己の評定値が低く現実的自己が高い傾向があるため、全体として広がっている。女子は男子に比べて自己を非常にきびしく見ていることがわかる。

概念による違いが少ないのは、慎重深い—慎重深くない、若々しい—大人っぽい、繊細な—大胆な、単純な—複雑なの4つで、項目は男子と共通しているが、値の幅は男子に比べて大きかった。

全体的に見ると、評定値の低い方から、理想的自己、好きな被服、現実的自己、制服の順に並んでおり、男子と共通していた。

制服に関しては、女っぼい—男っぼいがほぼ中央に位置しており、男子が詰襟を男らしさの象徴ととらえているのとは異なっていた。対象校(14校)の女子の制服は、冬用がブレザー8校、

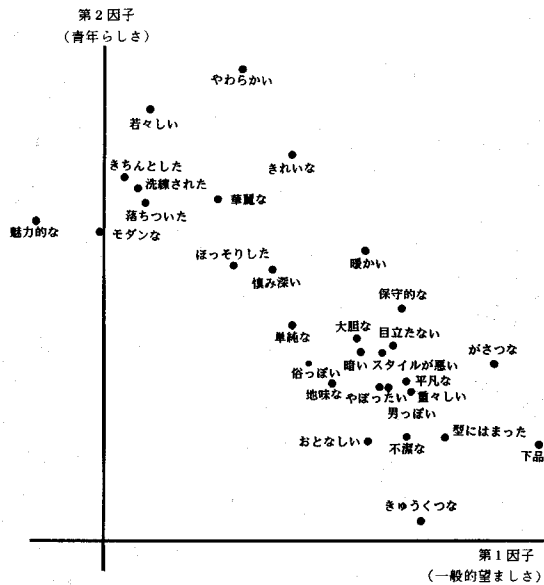


Fig. 3 Factor weight of rating items for 337 girl students.

セーラー服2校，その他（スモック，ボレロ，ブラウス）4校で，色は紺系，夏用は，12校が白のワイシャツまたはブラウス，2校がセーラー服であった。下衣はほとんどが紺のプリーツスカートである。ブレザーやワイシャツ，色が紺であることは女子特有のイメージにはならないため，制服が女っぽさを表すものとはとらえられないのではないかと推察された。

以上を，藤原の報告<sup>8)</sup>と比較すると，女子高校生は，女子大生とほぼ似た傾向を示していた。評定値の平均も理想的自己，好きな被服，現実的自己，嫌いな被服の順で，本結果と一致していることから，制服はどちらかという嫌いな被服に近いと判断でき，高校生は現在の制服には満足していないことが推察された。

## 2. 主因子法による因子分析

4概念をまとめて分析するため，ランダム抽出した男子322名，女子337名を代表集団として因子分析を行った。形容詞対30項目を変数にして主成分分析を行い，因子数を2と決定した。Fig. 3に，Varimax回転後の因子負荷量を女子についてプロットしたものを示す。

第1因子には，マイナス側に魅力的な，モダンな，プラス側に，下品な，がさつな，型にはまった，きゅうくつな，などの項目が位置している。この社会において老人から子どもまで，望ましくかつ期待されている項目から構成されているので，これを一般的望ましさの因子と命名した。第2因子には，プラス側にやわらかい，若々しい，きれいな，きちんとした，などの項目が位置し，若者に望まれかつ期待されている項目と考え，これを青年らしさの因子とした。寄与率は，第1因子40.79%，第2因子10.56%で，累積寄与率は51.36%である。

男子についても分析した所，女子と同因子が抽出された。各因子の負荷量，寄与率ともほぼ同様の結果が得られた。

ここで，藤原<sup>8)</sup>は第2因子として派手な，進歩的な，目立つ，風変りな，モダンなどの個性の因子を抽出している。これは，制服のない女子大生は，日頃から自分に似合ったものを意識

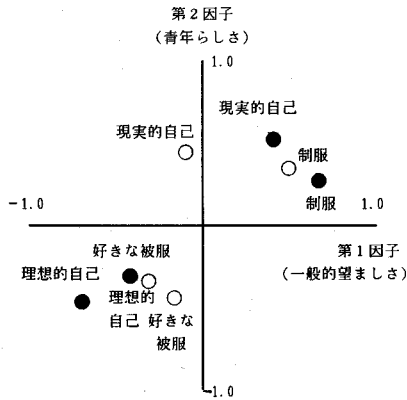


Fig. 4 Each position of four concept in the two dimensional semantic spaces.  
○: Boy students, ●: Girl students

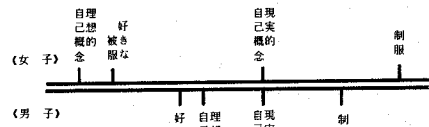


Fig. 5 Distance from actual self-concept in the semantic spaces.

し、自分の個性を的確にとらえて被服を自由に選択して着用しているためだと考えられる。それに対して、全員が同じ制服を着用している高校生の衣生活は、どうしても制服を中心とした発想になり、個性を意識しにくい状況であることが影響していると予想される。

次に、第1因子、第2因子について、各被験者の因子得点の平均値を各概念ごとに算出し、プロットしたものを Fig. 4 に示す。○が男子、●が女子である。

男女とも、理想的自己は、一般的には望ましいが青年らしくない位置にあり、制服は一般的には望ましくないが青年らしい位置にあることから、両者は性格が異なる概念を持っていることがわかる。また、好きな被服を着用することは理想的自己の実現に有効であるが、制服では

Table 1. Factor structure of ideal self-concept and favorite clothes.

	理想的自己概念			好きな被服		
	第1因子	第2因子	第3因子	第1因子	第2因子	第3因子
ゆったりした—きゅうくつな	0.944	-0.099	0.038	0.048	0.169	1.081
ほっそりした—ふっくらした	0.744	-0.185	0.421	0.059	-0.332	0.751
スタイルがよい—スタイルが悪い	0.737	0.104	0.238	-0.133	0.206	0.752
優雅な—がさつな	0.177	0.879	0.134	-0.711	-0.314	0.271
上品な—下品な	0.317	0.753	0.205	-0.711	-0.314	0.239
進歩的な—保守的な	0.036	0.733	0.268	-0.658	-0.393	0.176
風変わりな—型にはまった	0.375	0.609	0.068	-0.861	-0.069	0.161
しゃれた—やばったい	0.085	0.554	0.285			
繊細な—大胆な	0.123	0.533	0.262			
きちんとした—だらしない	0.143	-0.017	0.759	0.011	-0.714	0.117
若々しい—大人っぽい	0.299	0.122	0.724	0.027	-0.885	0.257
魅力的な—魅力的でない	-0.141	0.067	0.713			
モダンな—古風な	-0.011	0.032	0.699			
華麗な—質素な	0.226	0.048	0.696			
きれいな—醜い	0.185	0.384	0.656	0.329	-0.776	0.181
洗練された—素朴な	0.044	0.114	0.619	0.149	-0.747	0.227
寄与率 (%)	30.3	8.1	6.4	37.9	9.6	6.5
累積寄与率 (%)	30.3	38.4	44.8	37.9	47.5	54.0

実現しにくいことも明らかとなった。

また、現実的自己概念を中心とした時の他の3概念の意味空間的距離を、Osgoodの方法を用いて算出した結果を、Fig.5に示す。男女とも、理想的自己に最も近いのは好きな被服で、制服は理想的自己から離れた位置にあった。また、男子は女子に比べて各概念間の距離が短く、それぞれのイメージが接近していることがわかった。

### 3. 各概念の相関関係

すべての被験者の評定値を各概念ごとに因子分析し、Varimax回転を行った結果をまとめてTable 1, Table 2に示す。これにより、すべての概念で3つの因子が抽出された。

理想的自己における第1因子(寄与率30.3%)は、ゆったりした—きゅくつな、ほっそりした—ふっくらした、スタイルがよい—スタイルが悪いで、外観の因子とした。第2因子(8.1%)は、優雅な—がさつな、上品な—下品な、風変りな—型にはまった、などで、一般的望ましさとした。第3因子(6.4%)は、きちんとした—だらしない、若々しい—大人っぽい、魅力的な—魅力的でない、モダンな—古風な、きれいな—醜い、などで、青年らしさとした。

また、現実的自己についても理想的自己とほとんど同様の項目が抽出されたので、第1因子

Table 2. Factor structure of school uniforms and actual self-concept.

	制服のイメージ			現実的自己概念		
	第1因子	第2因子	第3因子	第1因子	第2因子	第3因子
やわらかい—かたい	0.735	-0.331	0.236	0.232	0.138	0.676
若々しい—大人っぽい	0.734	-0.214	0.231	0.103	-0.017	0.786
モダンな—古風な	0.718	-0.285	-0.365			
落ちついた—にぎやかな	0.655	0.098	0.468			
洗練された—素朴な	0.608	-0.328	0.071	0.058	0.082	0.593
魅力的な—魅力的でない	0.585	-0.364	-0.578	-0.094	-0.149	0.598
きれいな—醜い	0.551	-0.364	-0.578	0.119	0.453	0.654
きちんとした—だらしない	0.547	-0.182	0.371	-0.022	-0.073	0.765
華麗な—質素な	0.537	-0.221	0.448	0.118	0.171	0.571
ほっそりした—ふっくらした	0.522	-0.347	0.053	* 0.758	-0.232	0.256
暖かい—冷たい	0.506	-0.414	0.441			
優雅な—がさつな	0.158	-0.924	0.179	0.244	0.651	0.321
ゆったりした—きゅくつな	0.008	-0.785	-0.159	* 1.025	-0.126	-0.065
派手な—地味な	0.273	-0.752	-0.132			
しゃれた—やぼったい	0.104	-0.732	0.132	0.011	0.423	0.442
進歩的な—保守的な	0.298	-0.707	0.241	0.156	0.635	0.331
上品な—下品な	-0.125	-0.664	0.566	0.115	0.841	0.188
スタイルがよい—スタイルが悪い	0.307	-0.649	0.101	* 0.721	0.015	0.256
個性的な—平凡な	0.196	-0.642	0.286			
軽やかな—重々しい	0.181	-0.621	0.173			
女っぽい—男っぽい	0.221	-0.234	0.736	0.186	0.555	0.161
風変わりな—型にはまった	0.017	-0.392	0.721	0.198	0.816	-0.028
繊細な—大胆な	0.244	-0.318	0.629	0.061	0.511	0.278
自立つ—目立たない	0.374	-0.317	0.614	0.511	0.495	0.061
単純な—複雑な	0.395	0.037	0.609			
懐み深い—懐み深くない	0.434	-0.201	0.393			
高尚な—俗っぽい	0.297	-0.283	0.392			
明るい—暗い	0.222	-0.525	0.281			
清潔な—不潔な	0.075	-0.511	0.268			
活動的な—おとなしい	0.135	-0.412	0.247	0.265	0.412	0.034

\*は第1因子

寄与率(%)	40.3	12.2	3.9	26.9	13.3	7.0
累積寄与率(%)	40.3	52.5	56.4	26.9	40.2	47.0

(26.9%)を外観, 第2因子(13.3%)を一般的望ましき, 第3因子(7.0%)を青年らしきとした。

同様に, 好きな被服の第1因子(37.9%)は一般的望ましき, 第2因子(9.6%)は青年らしき, 第3因子(6.5%)は外観とした。

一方, 制服の第1因子(40.3%)は青年らしきとしたが, 第2因子(12.2%)は, 優雅な—がさつな, ゆったりした—きゅうくつな, しゃれた—やぼったい, 進歩的な—保守的な, などで, これを内面性とした。第3因子(3.9%)は, 女っぽい—男っぽい, 風変りな—型にはまった, 繊細な—大胆な, 目立つ—目立たない, などで, 外観的望ましきとした。このことから, 制服は, 一般的望ましきを内面的望ましきと外観的望ましきに分けて意識されていることがわかった。

次に, 各概念から抽出した3因子間の関連性を検討するため, 全被験者の因子得点を男女別に算出して積率相関係数を求めた。Table 3に理想的自己と好きな被服, Table 4に理想的自己と制服, Table 5に現実的自己と制服の相関係数を示す。いずれも( )内は男子である。

全体的に特に高い相関は示さなかった。しかし Table 3の, 理想的自己と好きな被服間には男女とも有意な相関が多くみられ, 好きな被服を着用することによって理想的自己を実現しよう

Table 3. Correlation coefficient between ideal self-concept and favorite clothes. ( ): boy students

理想的自己概念	好きな被服のイメージ		
	第1因子 一般的望ましき	第2因子 青年らしき	第3因子 外観
第1因子 外観	( 0.031 ) -0.118**	( -0.029 ) -0.076*	( 0.328** ) 0.137**
第2因子 一般的望ましき	( -0.315** ) -0.098*	( 0.127** ) -0.139**	( 0.007 ) 0.016
第3因子 青年らしき	( -0.255** ) -0.024	( 0.386** ) -0.227**	( -0.135** ) 0.062

\* 相関が5%水準で有意, \*\* 1%水準で有意

Table 4. Correlation coefficient between actual self-concept and school uniforms. ( ): boy students

現実的自己概念	制服のイメージ		
	第1因子 青年らしき	第2因子 内面性	第3因子 外観的望ましき
第1因子 外観	( -0.020 ) -0.003	( 0.052 ) -0.055	( 0.004 ) 0.070
第2因子 一般的望ましき	( -0.002 ) -0.006	( -0.043 ) -0.122**	( 0.092* ) 0.023
第3因子 青年らしき	( 0.039 ) 0.123**	( -0.229** ) -0.203**	( -0.190** ) -0.070

\* 相関が5%水準で有意, \*\* 1%水準で有意

Table 5. Correlation coefficient between ideal self-concept and school uniforms. ( ): boy students

理想的自己概念	制服のイメージ		
	第1因子 青年らしさ	第2因子 内面性	第3因子 外観的望ましさ
第1因子 外観	( 0.070 ) -0.065	( 0.015 ) 0.039	( -0.094* ) 0.096*
第2因子 一般的望ましさ	( -0.055 ) -0.007	( 0.146** ) 0.001	( 0.136** ) 0.041
第3因子 青年らしさ	( -0.025 ) 0.044	( 0.072 ) 0.004	( 0.117** ) -0.026

\* 相関が5%水準で有意, \*\* 1%水準で有意

とする意識が伺われる。一方、制服との相関を見ると、Table 4 より、女子は現実的自己の第3因子（青年らしさ）と制服の第1因子（青年らしさ）間に正の相関が見られ、制服は現実的自己の中で青年らしさを与えてくれる被服だととらえていることがわかる。しかし、女子は現実的自己のすべての因子で、男子は第2因子と第3因子で、制服の第2因子（内面性）間に負の相関があることから、制服の持つ個人の内面性の表現が、現実的自己を否定する方向に働き、本来の自己を表現していないことがわかる。

Table 5 では、男子はやや相関が見られるものの、全体的に係数が低いことから、ここでも制服は理想的自己とは異なるイメージを持つ被服であることが示唆された。しかし、制服の第3因子（外観的望ましさ）を見ると、男子は理想的自己のすべての因子間で、女子も第1因子間に有意な相関があることから、制服のイメージの中に社会から外見的に望まれ、期待されているものを投影していることがわかった。これは、制服を着用することで、社会から認められる自分を作り上げようとしていることを意味している。制服のみ外観の因子が抽出されていないことから、主観的な立場から自分を演出するという被服ではないことがわかる。

以上の結果を総合すると、高校生の制服に対する評価は全体的に低く、心理的快適さや満足感の得にくい被服であることがわかった。一方で、制服には社会からの期待が存在することもわかった。

制服は、1日の多くの時間を過ごす学校生活の場で着用する身近な被服である。着用者自身にとって快適な学校生活を過ごすためにも、それを補助できるようなものであることが期待される。また、客観的な評価を目的とするのではなく、自分を装うことで心理的な快適さを得る能力を中学高校のうちから養わせたいと考える。そのためには、衣生活全体を制服に頼るのではなく、主体性が発揮できるような衣生活の場、時間や心理的なゆとりが必要ではないかと判断された。

## ま と め

高校生の制服に対するイメージをとらえることを目的として、好きな被服のイメージ、自分



自身のイメージ、自分自身の理想のイメージとの関連から検討した。30項目の形容詞対を用いて4概念をSD法により調査し、因子分析を行った。

その結果、一般的望ましさと青年らしさの2つの因子を抽出した。因子得点の平均値を概念別に検討し、現実的自己概念からの距離を算出して意味空間にプロットしたところ、制服は現実的自己概念から遠い位置にあり、好きな被服と理想的自己概念とは互いに近い位置にあることがわかった。また、男子は女子に比べて各概念間の距離が短く、互いに近いイメージでとらえていた。

また、自己概念と制服のイメージとの関連性を検討するため別々に因子分析を行ったところ、理想的自己概念、現実的自己概念、好きな被服のイメージはいずれも一般的望ましさ、青年らしさ、外観の3つの因子が、制服のイメージでは青年らしさ、内面性、外観の望ましさの3因子が抽出された。これらの因子間相関を求めた結果、理想的自己概念は、好きな被服のイメージに対しては相関がみられたが、制服に対してはあまり相関がみられず、制服は理想的自己のイメージとは異なる被服であることが推察された。

## 文 献

- 1) 三井紀子, 酒井豊子; 家政学雑誌, **35**, 344 (1984)
- 2) 三井紀子, 酒井豊子; 家政学雑誌, **35**, 391 (1984)
- 3) 川本栄子, 上島雅子, 渡辺澄子; 家政学雑誌, **39**, 55 (1988)
- 4) 大枝近子; 家庭科教育, **64-2**, 92 (1990)
- 5) 例えば, 藤原康晴; 家政学雑誌, **33**, 548 (1982) など
- 6) 例えば, 中川早苗; 家政学雑誌, **32**, 764 (1981) など
- 7) 例えば, 神山 進; 繊維製品消費科学会誌, **24**, 69 (1983) など
- 8) 藤原康晴; 家政学雑誌, **38**, 593 (1987)
- 9) 脇本和昌, 垂水共之, 田中 豊編; パソコン統計ハンドブック I 基礎統計編, 共立出版(1984)
- 10) 脇本和昌, 垂水共之, 田中 豊編; パソコン統計ハンドブック II 多変量解析編, 共立出版(1984)